

主体的・対話的で深い学びの実現へ

これからの授業改善と学習デザインのためのガイド

アクティブ・ラーニングの誤解を超える

授業改善の視点は、単なる「活動」ではなく「思考の活性化」にある。



活動
(Activity)

従来の誤解

「アクティブ」という言葉から、生徒がダイナミックに動き回る、体験をたくさんさせるといった身体的な活動性が重視される傾向があった。



思考
(Thinking)

本質的な目標

しかし、最も活性化すべきは生徒の頭の中、すなわち「深い学び」である。生徒の思考が活性化し、深い学びが起きているかが重要となる。

「主体的・対話的で深い学び」を構成する3つの視点



主体的な学び (Proactive Learning)

- 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成と関連付けながら見通しを持って粘り強く取り組む。
- 自己の学習活動を振り返って次につなげる。



対話的な学び (Interactive Learning)

- 生徒同士の協働、教職員や地域の人ととの対話、先哲の考えを手掛かりに思考する。
- 自己の考えを広げ深める。



深い学び (Deep Learning)

- 習得・活用・探究の過程で、知識を相互に関連付けて深く理解する。
- 情報を精査して考えを形成し、問題を見いだして解決策を考え、創造に向かう。

なぜ今、学びの質的転換が求められるのか？

社会は、予め存在する「正解」を適用するだけでは解決できない課題に直面している。

知識基盤社会への移行

新しい知識、アイデア、技術のイノベーションが何よりも重視される社会。

他者とのコミュニケーションと協働（コラボレーション）が不可欠となる。

知識基盤社会への移行

新しい知識、アイデア、技術のイノベーションが何よりも重視される社会。

他者とのコミュニケーションと協働（コラボレーション）が



求められる能力

問題を共有する者が知識やアイデアを出し合い、不完全にせよ解を出して実行する力。

結果を見ながら解とゴールを常に見直す柔軟性。

学力観の変遷：求められる「力」はどう変わってきたか

平成元年（1989） 学習指導要領の4観点

- 関心・意欲・態度
- 思考・判断・表現
- 技能
- 知識・理解

学校教育法が示す 「学力の3要素」

「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう...」

1. 基礎的・基本的な知識・技能
2. これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等
3. 主体的に学習に取り組む態度

世界標準と日本の教育目標の共鳴

OECDが提唱する「キー・コンピテンシー」

単なる知識や技能だけでなく、様々なリソースを活用し、複雑な課題に対応できる力。

1. 社会・文化的、技術的道具を相互作用的に活用する力
2. 自律的に行動する力
3. 社会的に異質な集団で交流する力

日本が目指す「生きる力」

1998年以降、学習指導要領が掲げる中心的な理念。

1. 確かな学力
2. 豊かな人間性
3. 健康・体力

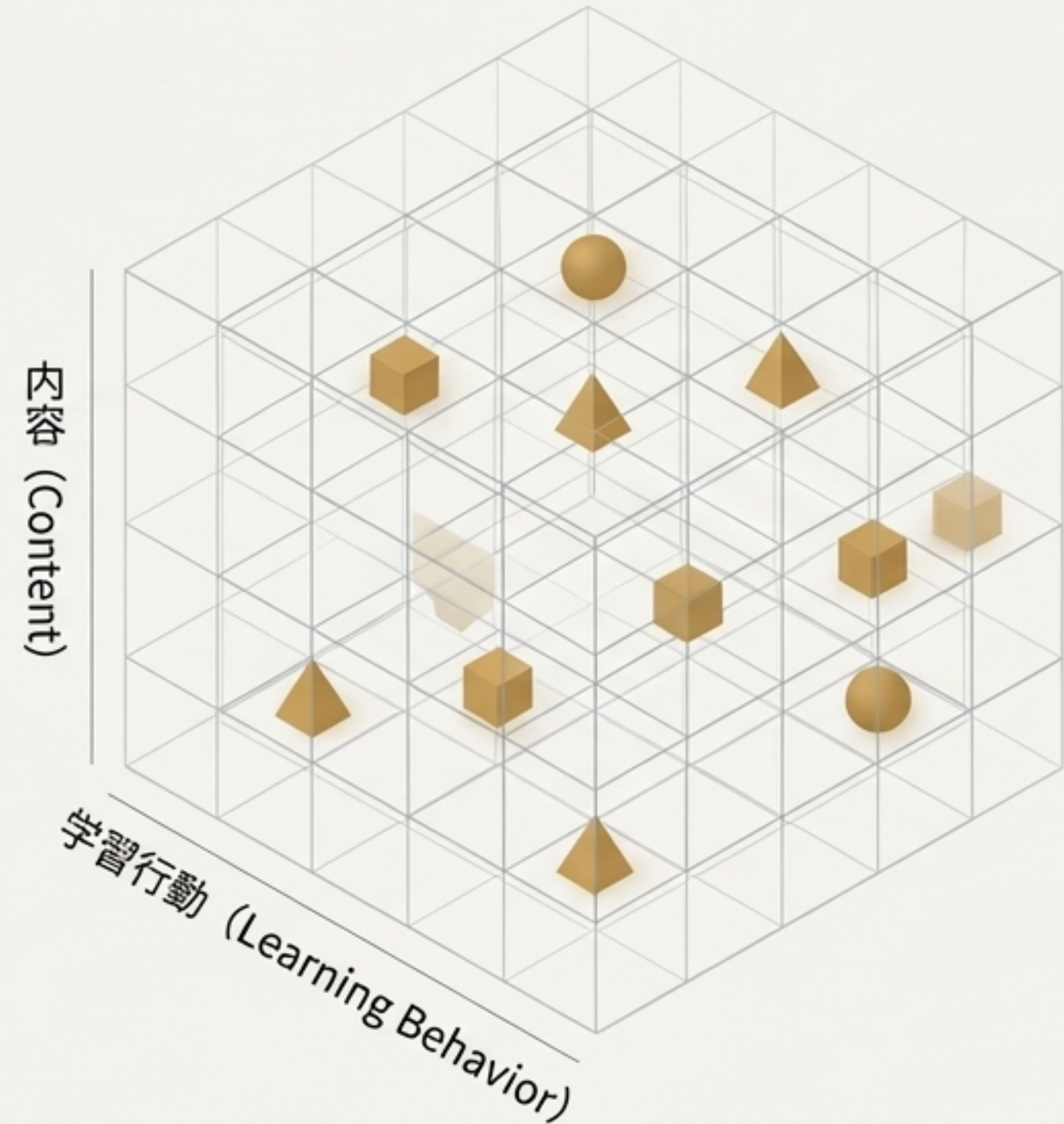
授業デザインの第一歩：学習目標の構造化

目標分析

「目標分析」とは、目標の構造を捉えること。曖昧になりがちな授業の目標を明確化し、評価観点を具体化する。

ブルームの分類学

B.S.ブルームの研究以降、教育目標を構造化する手法が発展。学習の「内容」と、そこで目指される「学習行動（能力）」をマトリックスで整理する。



なぜ目標分析が授業改善に繋がるのか

目標分析は、授業と評価を明確な観点に基づいて行うための羅針盤となる。



教師にとってのメリット

その授業で何を教えるべきかが明確に意識化される。



印象論ではない、明確な観点を持った学習評価が可能になる。



教育目標の高度化（例：深い学びへ）の方向性を示し、授業改善の方法を探る手掛かりとなる。

ICT：主体的・対話的な学びを導く学習環境

ICTは、従来見えにくかった学習プロセスを可視化し、全ての生徒の参加を促す。



- **思考の可視化**

各自が考えていることが互いに見え、教員は埋もれがちな意見も拾い上げられる。

- **潜在的対話の促進**

発言が苦手な生徒も、ネットワークを介して思考を共有し、対話的な学びに参加できる。

- **学習プロセスの記録**

思考のプロセスを残せるため、単元レベルから学校全体の教育課程レベルまで、授業改善の根拠資料となる。

「学びの連続体」としての授業デザイン

「ゴールの姿」と「方法・環境」の両方を明確に設計することが不可欠。
「型」をなぞるだけでは意味がない。

1. ゴールの明確化



この単元で、生徒にどのような資質・能力を、どこまで伸ばすのかを明確にする。

2. 学習活動の設計



ゴール達成のため、思考を広げる／深める／振り返る等の活動をダイナミックに組み合わせる。

3. チェックポイントの設定



どの場面で、どのように生徒の学びの姿を見るか計画する（形成的評価）。

新しい学力を測るための新しい評価：「パフォーマンス評価」

21世紀型能力のような“新たな学び”には、“新たな評価方法”が必要である。

パフォーマンス評価とは？

「パフォーマンス課題」に取り組ませることで、学力を「見える」ようにし、「ルーブリック」という評価基準で評価する。従来のテストでは見えにくい「思考力」「表現力」などを具体的な表れとして捉えることができる。



この評価は、あくまで一つの課題に対する結果。その背後にある生徒の思考や表現の特徴を把握しようと努めることが大切。

生徒の「当事者意識」を育む：主体的で深い学びの鍵

問いの質が思考を左右する

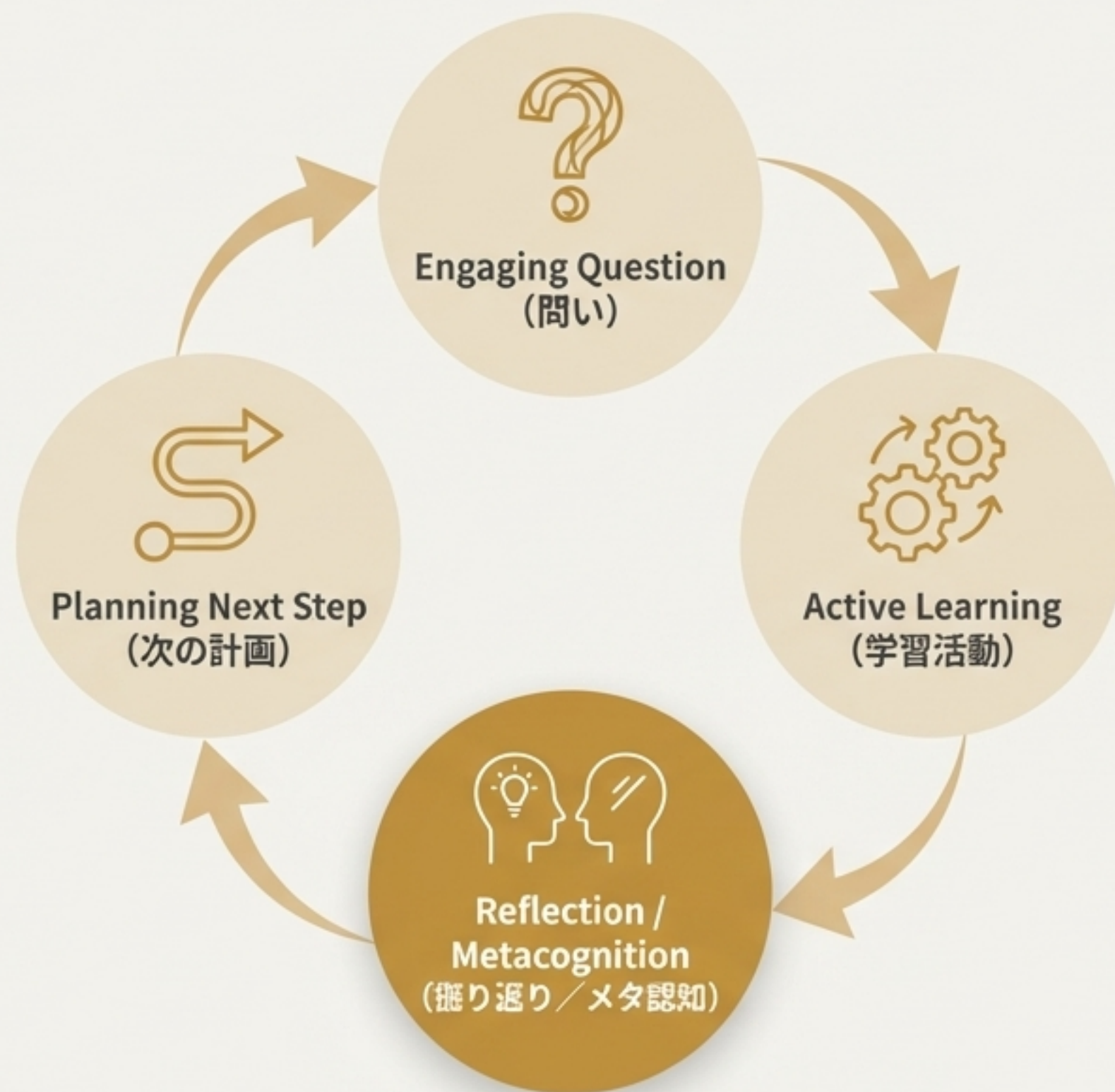
生徒の思考を活性化させるには、多様な考え方ができ、すぐには答えにたどり着けない深い課題が必要。

- 生徒自身が「知りたい」「解決したい」と思う課題設定が、「学びに向かう力」を育てる。

振り返りの支援が学びを次へ繋ぐ

メタ認知（Metacognition）：自分が今どういう状況にあるかをモニタリングし、次に何をすべきかを考える力が不可欠。

振り返りの仕組み（Mechanism for Reflection）：自分にとって必要な学習を考え、次の一步を踏み出すことの繰り返しが、学びをつくる。



絶えざる授業改善のサイクルが、未来を切り開く力を育む



このサイクルを通じて、生徒が学習内容を深く理解し、
生涯にわたって能動的に学び続ける力を育成することが、我々に求められている。